展覧会 岡本太郎

Okamoto Taro: A Retrospective

本職？人間だ。

PRESS RELEASE

表紙 岡本太郎ポートレイト ©平凡社

展覧会 岡本太郎

1970年に開催された日本万国博覧会（大阪万博）のテーマ館《太陽の塔》で知られ、今日でも幅広い世代の人々を魅了する芸術家・岡本太郎（1911-1996）。この度、その芸術人生を振り返る、大回顧展を開催します。

1929年に渡仏した岡本太郎は、抽象表現に影響を受けながら画家としてのアイデンティティを確立していきます。帰国後、自らの芸術理念の核となる「対極主義」を提唱し、制作のみならず『今日の芸術』、『日本の伝統』などの著作において文化・芸術論を展開しました。《太陽の塔》を頂点とするパブリックな空間に展開される巨大な彫刻や壁画など、生活の中で生きる作品群は、「芸術は大衆のものである」という岡本太郎の信念そのものを象徴し、それ故に没後もなお、多くの人々を惹き付けています。

表現活動が多岐にわたることから「何が本職なのか?」と問われることも多かった太郎の答えは「人間 — 全存在として猛烈に生きる人間」でした。未知なるものへの不安・怖れに常に果敢に孤独に切り込んでいった彼の表現活動は、小さな枠にとらわれることなく世界に対して「己全体を賭ける」ことであり、人間としての根源的な営みの豊かさを人々に喚起する試みであったといえるでしょう。太郎の思想・生き様が込められた作品を体感することは、不安定な状況が続く現在の社会を力強く生き抜いていくためのヒントを見つける機会となるかもしれません。

代表作はもちろん、これまであまり注目されてこなかった晩年の作品なども紹介しながらその生涯をたどる本展にて、《太陽の塔》だけではない、岡本太郎の全貌をお楽しみください。

TARO

展覧会のみどころ

1 最初期から晩年までの代表作・重要作を網羅

岡本作品のほぼすべてを所蔵する川崎市岡本太郎美術館と岡本太郎記念館が主催者として参画。両館の全面協力のもと、主要な代表作・重要作が勢ぞろいするほか、国内各地の美術館からの出品作品を加え、岡本芸術の全容に迫ります。

2 最大規模のスケールで大阪、東京、愛知を巡回

大阪、愛知では初めての回顧展実現の機会となるだけでなく、没後開催された回顧展のなかで最大規模といえるスケールの大回顧展となります。

3 岡本芸術と人間・岡本太郎を体感

いまなお人々を惹きつけ、世代を超えて共感をひろげる岡本太郎。本展は、岡本芸術の特質と本質、さらにはその底流にある人間・岡本太郎を、展覧会場の空間体験をとおして一人ひとりが感知する体感型の展覧会です。

展覧会概要

展覧会名

展覧会 岡本太郎

会期・会場

［大阪展］ 2022.7.23［土］—10.2［日］ 大阪中之島美術館
［東京展］ 2022.10.18［火］—12.28［水］ 東京都美術館
［愛知展］ 2023.1.14［土］—3.14［火］（予定） 愛知県美術館

主催：
［大阪展］ 大阪中之島美術館、公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団、川崎市岡本太郎美術館、NHK大阪放送局、NHKエンタープライズ近畿
［東京展］ 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館、公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団、川崎市岡本太郎美術館、NHK、NHKプロモーション
［愛知展］ 愛知県美術館、公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団、川崎市岡本太郎美術館、NHK名古屋放送局、NHKエンタープライズ中部

協賛：NISSHA
お問い合わせ：050-5541-8600（ハローダイヤル）

公式サイト https://taro2022.jp

報道関係お問い合わせ

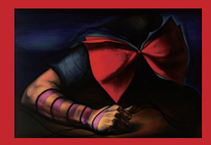
展覧会 岡本太郎 広報事務局（共同PR内） 〒104-0045 中央区築地 1-13-1 銀座松竹スクエア10階
TEL:03-6264-2382 FAX:0120-653-545 Email:taro2022-pr@kyodo-pr.co.jp

岡本太郎 略年譜

（1911–1996）

1911（明治44）		2月26日、漫画家、岡本一平と歌人で小説家の岡本かの子の長男として川崎に生まれる。
1917（大正6）	6歳	青山の青南小学校に入学するも学校になじめず転校と退学を繰り返す。
1918（大正7）	7歳	4つ目の学校、慶應義塾幼稚舎に入学。寄宿舎に入る。
1929（昭和4）	18歳	慶應義塾普通部を卒業。東京美術学校（現東京藝術大学）西洋画科に入学。半年で中退。 12月 父、一平のロンドン軍縮会議取材に同行し、一家で渡欧。
1930（昭和5）	19歳	1月パリに到着。両親がロンドンへ出発後、芸術家を目指すため単身パリに残る。 1930年代を通して、最先端の芸術運動に参加。 パリ大学に在籍し哲学、社会学のほか、マルセル・モースに民族学を学ぶ。
1940（昭和15）	29歳	ドイツ軍のパリ侵攻を受け、最後の引揚船、白山丸で帰国。
1941（昭和16）	30歳	第28回二科展に《傷ましき腕》など滞欧作品4点出品。「岡本太郎滞欧作品展」（銀座三越）を開催。
1942（昭和17）	31歳	中国戦線に出兵。
1946（昭和21）	35歳	中国、長安付近での俘虜生活を経て復員。青山の自宅と作品の焼失を知る。 世田谷にアトリエを構える。
1947（昭和22）	36歳	二科会員に推挙される。この頃より「対極主義」を提唱。
1948（昭和23）	37歳	花田清輝らと「夜の会」を結成。「アヴァンギャルド芸術研究会」を発足。
1951（昭和26）	40歳	東京国立博物館で縄文土器を見て衝撃を受ける。
1952（昭和27）	41歳	「縄文土器論」を発表。 モザイクタイル画《太陽の神話》制作。日本橋高島屋地下通路にモザイクタイル壁画《創生》を制作。
1953（昭和28）	42歳	パリ、ニューヨークで個展。
1954（昭和29）	43歳	青山に自宅兼アトリエを新築。「現代芸術研究所」を設立。 第27回ヴェネツィア・ビエンナーレに日本代表として出品。 『今日の芸術』（光文社）を刊行し、ベストセラーとなる。
1956（昭和31）	45歳	旧東京都庁舎（丹下健三設計）に《日の壁》《月の壁》他11面の陶板壁画を制作設置。 『日本の伝統』（光文社）出版。
1958（昭和33）	47歳	『日本再発見—芸術風土記』（新潮社）出版。
1961（昭和36）	50歳	『忘れられた日本〈沖縄文化論〉』（中央公論社）出版。毎日出版文化賞受賞。
1967（昭和42）	56歳	日本万国博覧会（大阪万博）のテーマ館展示プロデューサーの委嘱を受ける。 メキシコで壁画《明日の神話》の依頼を受ける。
1970（昭和45）	59歳	大阪万博シンボルゾーン中央に《太陽の塔》《母の塔》《青春の塔》を含むテーマ館が完成。
1981（昭和56）	70歳	「芸術は爆発だ！」のセリフが有名となったテレビCMに出演。
1996（平成8）		1月7日、急性呼吸不全により死去（享年84）。
1998（平成10）		青山の自宅兼アトリエが岡本太郎記念館として開館。
1999（平成11）		川崎市岡本太郎美術館開館。
2003（平成15）		所在不明となっていた《明日の神話》がメキシコ市郊外で発見される。
2008（平成20）		渋谷駅に壁画《明日の神話》設置。
2018（平成30）		《太陽の塔》内部の修復・再生が完了し、内部の再公開開始。

小学校入学の頃の岡本太郎


《傷ましき腕》1936/49年
川崎市岡本太郎美術館蔵

岡本太郎『今日の芸術』
光文社 1954年

《午後の日》1967年
岡本太郎記念館蔵

「展覧会のみどころ/展覧会概要」ページ背景図版
《傷ましき腕》1936/49年 川崎市岡本太郎美術館蔵、《太陽の塔》1970年 万博記念公園、《明日の神話》1968年 川崎市岡本太郎美術館蔵、
《遊魂》1988年 川崎市岡本太郎美術館蔵、《森の掟》1950年 川崎市岡本太郎美術館蔵、《にらめっこ》1978年 川崎市岡本太郎美術館蔵 すべて部分

第1章 “岡本太郎”誕生
—パリ時代—

1929年、18歳の冬に家族とともにヨーロッパに渡った岡本太郎は、単身パリに残り芸術家を目指し始めました。ピカソの作品との衝撃的な出会いを経て独自の表現を模索していく中、前衛芸術家や思想家たちと深く交わり最先端の芸術運動に身を投じていきます。さらに、パリ大学で哲学や社会学のほか、マルセル・モースに師事して民族学を学び、その後の岡本芸術を生み出す土台となる思想を深めていきました。代表作《傷ましき腕》や《空間》など、パリ時代の作品を通し、“岡本太郎”誕生の背景を探ります。

《空間》1934/54年　川崎市岡本太郎美術館蔵
パリ時代に制作された代表作の一つ。1937年に刊行した初の画集『OKAMOTO』に《傷ましき腕》とともに掲載されている。

《傷ましき腕》1936/49年　川崎市岡本太郎美術館蔵
国際シュルレアリスム・パリ展に出品され、高く評価された作品。

ぼくはパリで、人間全体として生きることを学んだ。
画家とか彫刻家とか一つの職業に限定されないで、
もっと広く人間、全存在として生きる。

『壁を破る言葉』イースト・プレス、2005年

第2章 創造の孤独
—日本の文化を挑発する—

第二次世界大戦の勃発により約10年間滞在したパリから帰国した太郎は、中国戦線へ出征、俘虜生活を経て1946年に復員しました。戦後、旧態依然とした日本の美術界に接し、その変革を目指し「夜の会」を結成。抽象と具象、愛憎、美醜など対立する要素が生み出す軋轢のエネルギーを提示する「対極主義」を掲げ、前衛芸術運動を開始します。また、新しい芸術思想を提示した著書『今日の芸術』がベストセラーとなり、太郎は、戦後日本の芸術の牽引者というだけでなく、文化領域全体の挑発者としての存在感を増していきました。《森の掟》や《重工業》などの代表作を含む1940～50年代に描かれた作品とともに、アヴァンギャルドの旗手としての芸術的成果を振り返ります。

今日の芸術は、うまくあってはいけない。きれいであってはならない。
ここちよくあってはならない。

「今日の芸術」光文社、1954年

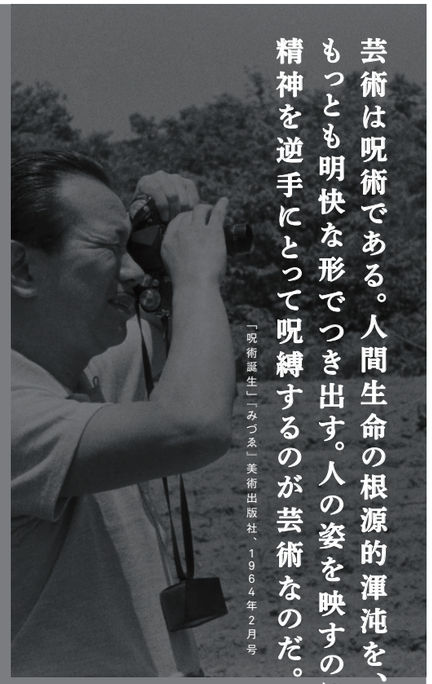
《夜》1947年　川崎市岡本太郎美術館蔵
前衛芸術家らが集った「夜の会」の名称のもとになった作品。

《森の掟》1950年　川崎市岡本太郎美術館蔵
異質なものを画面に混在させた「対極主義」の代表作。

《燃える人》1955年　東京国立近代美術館蔵
1954年のビキニ環礁の水爆実験で第五福竜丸が被爆した事件をもとに描かれた。

第3章 人間の根源
—呪力の魅惑—

前衛芸術運動を推し進める一方、太郎は自らの出自としての日本の文化のありかたにまなざしを投じます。本章では、太郎に大きな刺激を与え、それまでの作風を変える契機にもなった1951年の縄文土器との出会いや、東北から沖縄に至る日本各地のほか、韓国やメキシコなどを含めた太郎の広大なフィールドワーク（実施調査）に着目し、各地で撮影した写真に込められた民族学的洞察と日本文化への視座を提示します。また、このころから多くみられるようになる、書の筆致を思わせる呪術性を秘めたような抽象的なモチーフを描いた絵画作品なども含め、その後の《太陽の塔》につながる60年代の呪術的な世界観をのぞくことができる、エネルギー溢れる作品群を一望します。



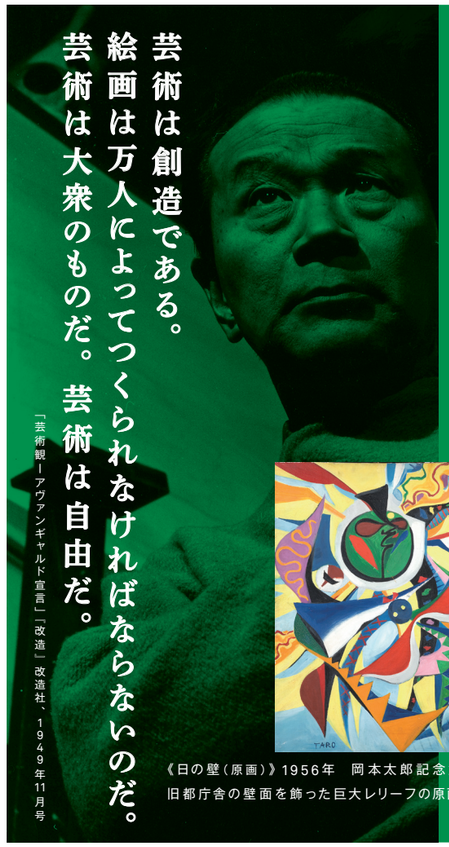
芸術は呪術である。人間生命の根源的渾沌を、
もっとも明快な形でつき出す。人の姿を映すのに鏡があるように、
精神を逆手にとって呪縛するのが芸術なのだ。

「呪術誕生」「みづゑ」美術出版社、1964年2月号

《縄文土器》
1956年3月5日撮影（東京国立博物館）
川崎市岡本太郎美術館蔵

《愛撫》1964年　川崎市岡本太郎美術館蔵

《イザイホー》（沖縄県久高島）
1966年12月26－27日撮影
川崎市岡本太郎美術館蔵

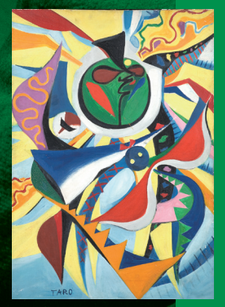


芸術は創造である。
絵画は万人によってつくられなければならないのだ。
芸術は大衆のものだ。芸術は自由だ。

「芸術観ーアヴァンギャルド宣言」「改造」改造社、1949年11月号

第4章 大衆の中の芸術

芸術とは生活そのもの。そう考える太郎にとって衣食住をふくめた人々の生活のすべてが表現のフィールドでした。1952年に絵画の工業生産化の提案として制作したモザイクタイルを用いた作品《太陽の神話》をきっかけに、太郎の表現は、画廊や美術館から飛び出し、地下鉄通路や旧都庁舎の壁画、屋外彫刻などのパブリックアートをはじめ、暮らしに根差した時計や植木鉢、新聞広告などの生活用品にいたるまで、大衆にダイレクトに語りかけるものへと広がっていきました。絵画や彫刻といった既成のジャンルを軽々と飛び越え、積極的に社会に飛び出していった太郎の好奇心と発想力を紹介します。



《日の壁（原画）》1956年　岡本太郎記念館蔵
旧都庁舎の壁面を飾った巨大レリーフの原画。

《犬の植木鉢》1955年
川崎市岡本太郎美術館蔵

《光る彫刻》1967年　川崎市岡本太郎美術館蔵
宇宙空間で生命が生まれる瞬間を表した
彫刻兼照明器具として制作された。

第5章 ふたつの太陽
―《太陽の塔》と《明日の神話》―

「人類の進歩と調和」を掲げた1970年の大阪万博。その「テーマ館」のプロデュースを依頼された太郎は、人間にとっての真の「進歩と調和」は、科学技術の推進に限るものでも、同調や馴れ合いによるものでもないとし、敢えてテーマとは真逆の価値観ともいえる、人間の太古からの根源的なエネルギーを象徴させた《太陽の塔》を制作しました。《太陽の塔》と並行して描かれたのが現在渋谷駅に設置されている幅30mの巨大壁画《明日の神話》です。原子爆弾を主題に人類の「進歩」に内在する負の側面を見据え、それを乗り越えていく人類の未来への期待が込められています。この「ふたつの太陽」について、太郎が残したドローイングや資料とともにその現代的意味を考えます。

《明日の神話》1968年　川崎市岡本太郎美術館蔵
メキシコのホテルの為に制作された幅30mの巨大な壁画。長らく所在が不明となっていたが2003年に発見され、修復を経て2008年に渋谷駅に設置された。本展では幅約11mの下絵を展示。

《太陽の塔》1970年　万博記念公園
大阪万博のテーマ館として建てられた。
高さは70m。本展では1/50の作品を展示。

太陽は人間生命の根源だ。惜しみなく光と熱をふりそそぐ
この神聖な核。われわれは猛烈な祭りによって太陽と交歓し、
その燃えるエネルギーにこたえる。

《太陽の塔》銘板より

第6章 黒い眼の深淵
―つき抜けた孤独―

大阪万博を経て岡本太郎の存在はより広く大衆に受け入れられるようになりました。なかでも、1953年の放送開始当初から出演していたテレビでは、81年の「芸術は爆発だ！」と叫ぶCMをはじめ数多くの番組に登場し、日本で最も顔を知られる芸術家となっていきます。しかし、絵画制作への意欲は衰えることはありませんでした。異空間へいざなう入口のような「眼」をモチーフとした作品群のほか、国際展等で発表した過去作品に大胆に加筆した絵画など、最晩年まで自らの芸術をダイナミックに追求し続けていきました。1996年に太郎はこの世を去りますが、その直後から再評価の機運が高まります。その陰には50年に渡り秘書として太郎の活動を支えた岡本敏子の存在がありました。敏子の尽力により太郎の芸術や著作、そして力強い言葉は、人々に生きる勇気を与え、世代を超えて受け継がれています。

《遊魂》1988年　川崎市岡本太郎美術館蔵

《春》1947年、その後加筆　岡本太郎記念館蔵
1947年の第一回美術団体連合展出品作。
その後、作家自身により大きく加筆された。

《雷人》1995年（未完）　岡本太郎記念館蔵

面白いねえ、実に。オレの人生は。
だって道がないんだ。眼の前にはいつも、
なんにもない。ただ前に向かって
身心をぶつけて挑む、瞬間、瞬間があるだけ。

「岡本太郎」平凡社、1979年